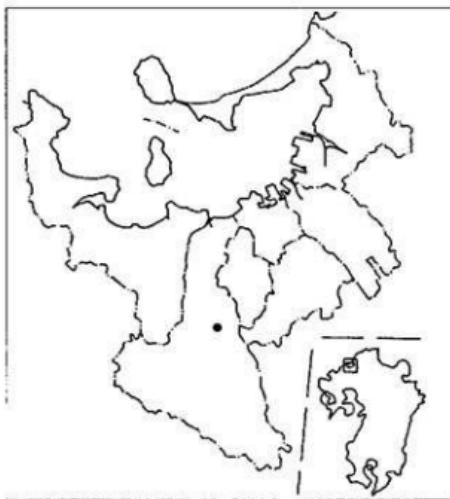


熊本遺跡群 I



1 9 9 3

福岡市教育委員会

序

福岡市は、1995年のユニバーシアード福岡大会に向けて、都市基盤の整備を最重点課題としています。今回調査を行った東入部地区自転車歩行者道の調査は、国道263号線に交通安全対策上歩道の建設が必要となり、その為に実施したものです。

調査地周辺は圃場整備に伴う調査で、縦文時代から中世にかけての各時期の遺構・遺物が発見されています。特に東入部遺跡では青銅器を副葬された首長墓が、清末遺跡では鎌倉時代の居館跡が発見されています。

今回の調査面積は25m²と狭いものでしたが、古墳時代の壺棺墓を検出しました。この種の壺棺墓は、市内でも出土例が少なく貴重なものです。

本書が市民の皆様に広く活用されることを願うとともに、発掘調査・資料整理で御協力を賜わった方々に対して深い感謝の意を表します。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　　言

1. 本書は、平成3年9月17日から10月2日にかけて福岡市教育委員会が行った、早良区重留地内における熊本遺跡群の第1次調査である。
2. 発掘調査は福岡市土木局道路建設課が計画した、国道263号線早良区東入部地内自転車歩行者道設置工事に伴う調査として実施した。
3. 調査は埋蔵文化財課の山崎龍雄が担当した。
4. 遺構・遺物の実測・撮影・製図は調査担当者の他に、平川敬治・井上加代子が行った。
5. 本書に使用した方位は磁北である。
6. 本報告書に関する記録・遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵保管する予定である。
7. 壺棺墓出土の赤色顔料については本市埋蔵文化財センターの本田光了氏に分析を依頼した。
8. 本書の執筆と編集は山崎が行った。

本文目次

	頁
I. はじめに	3
1. 調査に至る経過	3
2. 調査体制	3
II. 遺跡の立地と環境	5
III. 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	7
3. まとめ	19
4. 棺棺内の赤色顔料について	20

挿図目次

Fig. 1 調査地点の位置と周辺遺跡 (1/25,000)	2
Fig. 2 調査地点位置図 (1/4,000)	4
Fig. 3 調査地点現況図 (1/300)	4
Fig. 4 調査区遺構全体図 (1/100)	5
Fig. 5 調査区東壁・南西壁土層図 (1/60)	6
Fig. 6 S K06出土遺物 (1/3)	8
Fig. 7 S K08 (1/20)	9
Fig. 8 S K08出土遺物 1 (1/3)	10
Fig. 9 S K08出土遺物 2 (1/3)	11
Fig. 10 S K08出土遺物 3 (1/3)	12
Fig. 11 S K08出土遺物 4 (1/3)	13
Fig. 12 S T09 (1/20)	15
Fig. 13 S T09出土遺物 1 (1/8)	16
Fig. 14 S T09出土遺物 2 (1/8)	17
Fig. 15 S X02・包含層・表土出土遺物 (1/3)	18

図版目次

P L . 1 (1)調査区遠景 (北東から) (2)調査区近景 (北東から)	
P L . 2 (1)調査区南側 (北西から) (2)S K08 (北東から)	
P L . 3 (1)S T09 (北西から) (2)S T09 (南西から) (3)S T09墓牋 (南西から)	
P L . 4 (1)S K06 (西から) (2)S K06・包含層遺物	
P L . 5 S K08出土遺物	
P L . 6 S K08・S T09出土遺物	



1. 熊本遺跡群
 2. 重留遺跡群
 3. 清末遺跡群
 4. 拝塚古墳
 5. 四箇遺跡群
 6. 田村遺跡群
 7. 次郎丸高石道跡
 8. 鶴可道跡
 9. 重留古墳群
 10. 三郎丸古墳群

Fig.1 調査地点の位置と周辺遺跡 (1/25,000)

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本市では国道263号線の改良事業として、早良区重留地内において、道路幅を拡張して自転車歩行者道を建設する事業を行っている。本市教育委員会ではそれに対して、事前調査を行い、埋蔵文化財を確認した。その取り扱いについて、本課と事業担当の道路建設課で協議を行い、調査費を原因者負担とし、発掘調査を行う事となった。調査は試掘調査で遺構が確認された部分について行った。調査地点は分布地区では、西側の重留遺跡群と東側の熊本遺跡群の間に挟まれた地区であるが、地形的状況から見て熊本遺跡群の範囲内と考えた。

発掘調査は平成3年9月17日から10月2日迄実施した。調査面積は25m²である。道路沿いで重機が入らない為、表土除去から埋戻し迄人力で行った。国道は車の通行量が多く、安全対策には特に気をつけた。

2. 調査体制

調査委託 福岡市土木局道路建設課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学

同課第1係長 飛高憲雄

調査担当 同課文化財主事 山崎龍雄・吉武学（事前審査）

専務担当 同課第1係 寺崎幸男

整理補助 平川敬治・井上加代子

調査・整理作業 濑戸啓治・西畠盛行・清原ユリ子・佐藤テル子・柴田勝子・土斐崎初栄・堀川ヒロ子・吉岡出鶴子・井上マツミ・池田礼子・内尾トミ子・吉山祝子・松下節子・坂木智子・岩下郁子・大賀順子・田口美智子・釘崎由美

なお調査にあたっては掛けの仮置きなどで地元の皆様及び土木局の担当者に多大な協力と理解を得た、記して感謝の意を表します。

遺跡調査番号	9127		遺跡略号	KMM	
調査地地籍	福岡市早良区重留地内			分布地図番号	No.85(人部)
申請面積		調査対象面積	56.7m ²	調査実施面積	25m ²
調査期間	1991年9月17日～10月2日	事前調査番号	3-1-37		

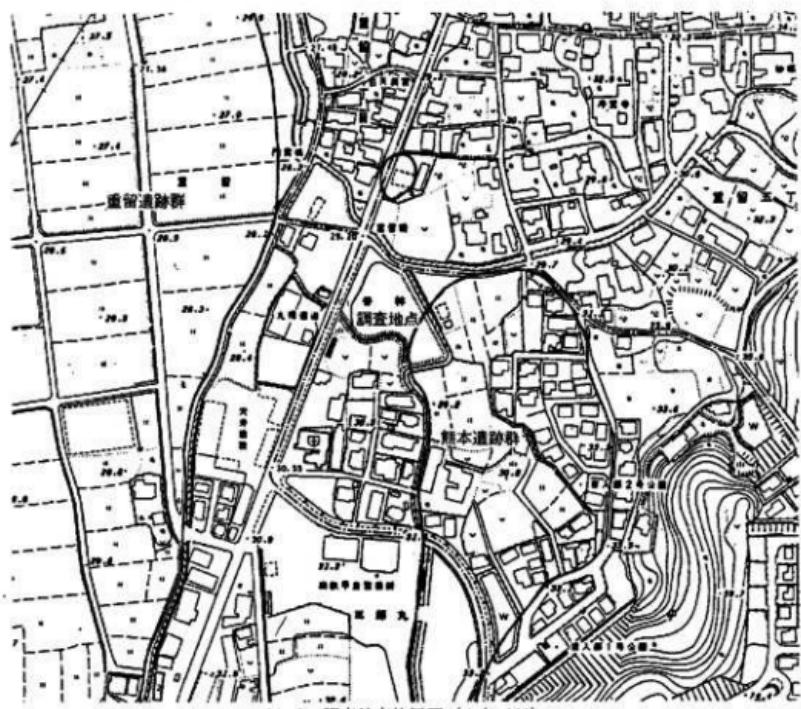


Fig.2 調査地点位置図 (1/4,000)

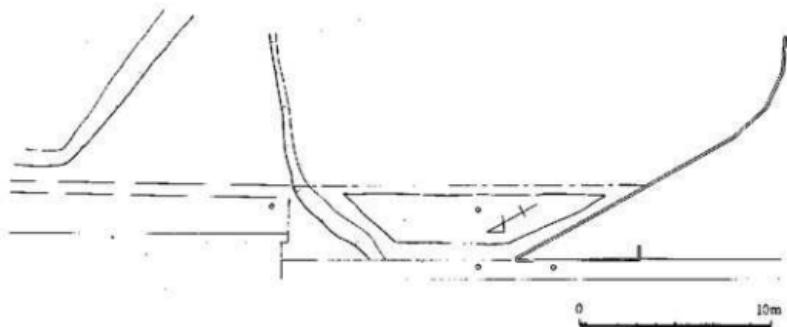


Fig.3 調査地点現況図 (1/300)

II. 遺跡の立地と環境

調査区の所在する熊本遺跡群は、福岡市の西南部、博多湾に向って扇形に広がる早良平野の奥深く、油山山麓沿いに立地する。早良平野は中央部を北に向って貫流する室見川と十郎川・金屑川をはじめとする中小河川の沖積作用によって形成された小平野であるが、南側を背振山地、西側を飯盛・長垂丘陵、東側を油山とその派生丘陵によって限定され、文化的にも一つのまとまりを持った地域を形成している。

周辺は現在行なわれている農業基盤整備事業や民間の開発などによる調査が増加しており、考古学的状況がかなりわかりつつある。

旧石器時代遺跡としては吉武遺跡群がある。縄文時代になると脇山遺跡や入部遺跡・四箇遺跡・田村遺跡などがあり、前期から晩期にかけての遺構・遺物が発見されている。弥生時代になると、田村遺跡群や重留遺跡群などで、前期初めから中期に至る集落・墓塚墓地を確認している。古墳時代になると重留地区には中期に押塚、吉武地区には樋渡古墳などの首長墓と見られる前方後円墳が造営され、後期には山沿地域に群集墳が密集し、また製鉄に関連する遺構も多く見つかっている。

III. 調査の記録

1. 調査の概要

調査区は油山西麓の標高30mを測る地点にあり、現況は水田であった。調査区周辺は金屑川の沖積作用によって形成された扇状地である。

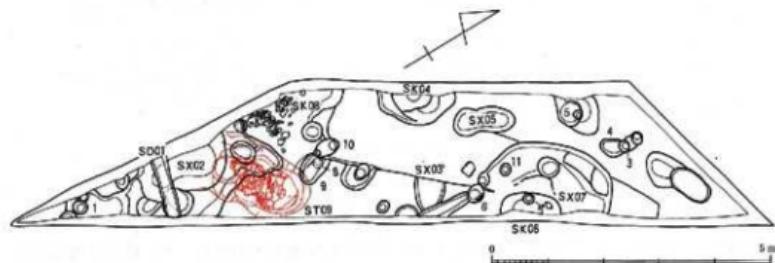
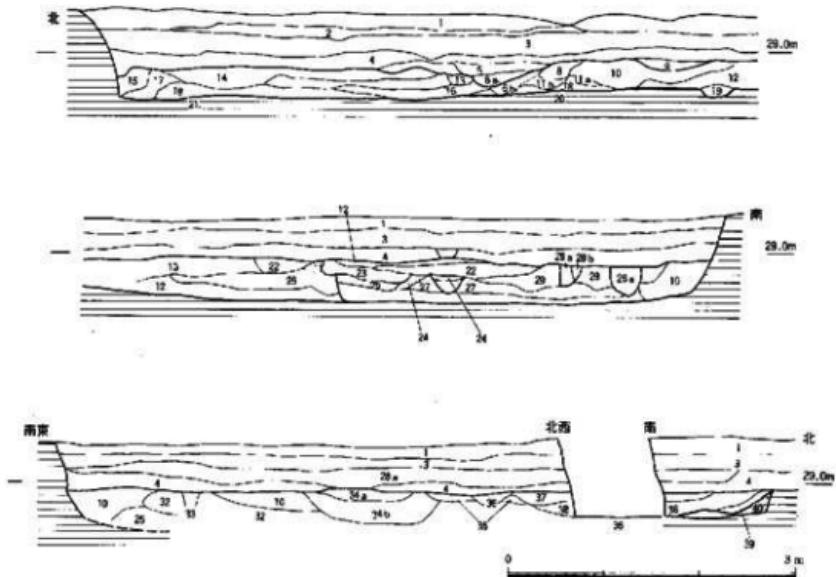


Fig.4 調査区遺跡全体図 (1/100)



- 土層名 称
1. 黒沃色土 (耕作土)
 2. 1に墨黒灰色粘土ブロック混入 (未干)
 3. 黒色粗砂混土
 4. 黑褐色粗砂混土
 5. 黑色土、やや軟質で粒子が細かい
 6. a. 5より少しだけ硬質
 - 6b. 6aより明らかに白色粗砂離ブロック混入
 7. 4に暗青褐色粘土ブロック少混入
 8. 7に近い
 9. 黑褐色粗砂混土。軟質で10の小ブロックを少混入
 10. 黄褐色粗砂泥質土。硬い
 - 11a. 淡黃褐色粗砂混土
 - 11b. 11よりやや硬い
 12. 暗褐色粗砂 (市面は10との境が不明)
 13. 深褐色粗砂
 14. 10に近くやや硬い
 15. 墓窓褐色粗砂離
 16. 暗黒褐色粗砂離に15を混入
 17. やや弱い灰褐色砂質シルトで12をわずかに覆人
 18. 細い埋褐色粗砂離
 19. 黑色粗砂離 (有機物を含む)
 20. 腐れた灰白色粗砂離
 21. 黄褐色粗砂離
 22. 黑褐色粗砂離
 23. 黄褐色粗砂離粘土と黒褐色粗砂混土の混合
 24. 25-26の混合
 25. 灰色粗砂
 26. 暗黄褐色粘土黄褐色砂、12より硬い
 27. 灰色粗砂
 - 28a. 黑色土、軟質で粘性が強い
 - 28b. 28aに暗青褐色粗砂混粘土混入
 29. 暗青褐色粗砂混入粘土と黒褐色粗砂混粘土の混合
 30. 黑褐色土、粘性が強く、軟質
 31. 黑褐色粗砂に灰白色砂を混入
 32. 暗褐色粗砂、少し粘性がある
 33. 黑褐色粗砂混土、上面黄褐色を帯びる
 34. 黑褐色粗砂混土、上面黄褐色を帯びる
 - 34b. 黑褐色粗砂混土、軟質で粘性がある
 35. 暗青褐色粗砂混粘土質土
 36. 黑褐色粗砂混土に黄褐色粘土ブロック混入
 37. 暗青褐色粗砂混土で飲分を若干含む
 38. 黑褐色粘土質土、軟質
 39. 暗青褐色粘土質砂に38を少量混入
 40. 暗青褐色粗砂の高粘質土

Fig.5 調査区東壁・南西壁十層図 (1 / 60)

発掘調査は試掘調査によって造構が確認された部分について行った。調査区が狭く、道路沿いで重機の専人が出来なかった為、掘り下げから埋戻し作業迄人力で行った。排土は隣接地に仮置きした。交通量の多い国道沿いの調査区であり、安全面においては十分な対応を行った。

遺構面迄の基本層序は以下のとおり。第1層・黒灰色土（耕作土）15~20cm、第2層・黒色砂質土15~25cm、第3層・黒褐色粗砂混り土（包含層）15~25cmであり、遺構面はその下の黄褐色粗砂混り粘質土である。しかし、この面も沖積作用による堆積土であり、更に30cm程掘り下げるところ白色から灰色の粗砂繊になり、湧水がひどくなる。この面でもピットらしき落ち込みがあったが、遺構として把握出来なかった。

検出した主な遺構は、弥生中期初めから中世迄の各時期の土坑5基、古墳時代前期前半の豪棺墓1基、溝1条などである。出土遺物は弥生時代の土坑から量的にまとまって出土している。

2. 遺構と遺物

土坑

番号を付したのは5基であるが、主なものについて述べる。

SK04

調査区西壁にかかり、完掘していない。現状では梢円形を呈すと考えられる。規模は長径1.4m、深さ0.5mを測る。南側に一段テラスを持つ。断面土層観察によれば、直径25cmのピットが上面から切り込んでいる。埋土は黒色粗砂混り土を主体とする。

出土遺物　赤土器の細片が4点、刺片が2点出土している。

SK06 (P.L.4)

調査区西壁中央で検出したが、東半分は、調査区外である。確認規模は長径1.2m、幅0.3m、深さ25cmを測り、平面形は梢円形を呈すと思われる。埋土は黒色土を主体とするが、下半は砂質となる。

出土遺物 (Fig. 6、P.L.4)　土器の杯・皿や滑石製石鍋などの破片が少量出土している。

1・2は瓦器柄。1は口縁部1/8片で、復元口径14.0cmを測る。色調は内外灰色を呈し、胎土は石英・雲母微粒をわずかに含む。焼成は普通。2は底部1/3片で、復元高台径約7cmを測る。短く太い高台が付く。色調は灰白色で、胎土に石英粒子をわずかに含む。3・4は上部器の杯。3は1/8片で復元口径13.0cmを測る。大きく開く器形で、底部はヘラ切り。色調は暗灰色、胎土は普通。4は3より大形。1/3の小片で、復元口径14.2cm、器高3.1cmを測る。底部は糸切り。色調は灰褐色を呈し、胎土に金雲母粒子を含む。5は土器の小皿1/3片・復元口径8.4cm、器高1.1cmを測る。底部は糸切りで板目が残る。内外面ナデ。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に雲母・石英・黒色粒子を含む。6は滑石製石鍋の底部を再利用した製品と考えられる。底部に2ヶ所鋸びついた金具が残っている。外面かなり欠損・剥落する。

SK08 (Fig. 7、P.L.2)

南側で検出した一部調査区外にかかる平面形が不定形を呈する浅い土坑である。規模は南北長1.5m、東西幅1.5m以上深さ10cmを測る。埋土は暗黄褐色粗砂混り粘質土である。遺物は

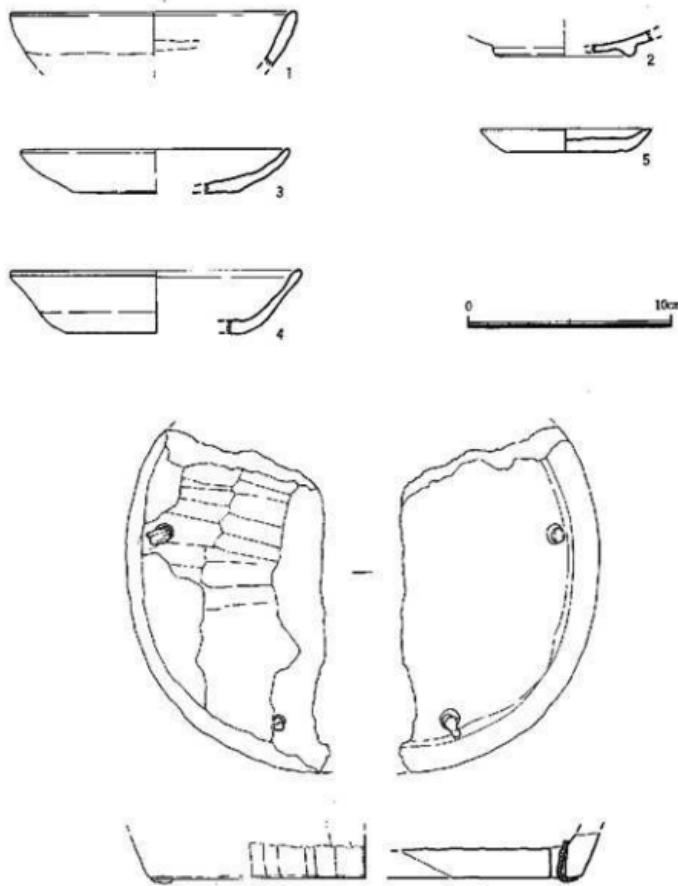


Fig.6 SKO 6 出土遺物 (1/3)

南西側に床面からやや浮いた状態で検出されている。

出土遺物 (Fig. 8 ~11、PL. 5) 弥生時代中期初め頃の遺物がまとまって出土しているが、器種的には壺と甕に片寄る。石器としては太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・叩石・砥石・黒曜石剥片などがある。

7 ~10は壺。7・8は粘土帯を貼付けし、口縁部を肥厚させた器形。7は復元で口径27cm

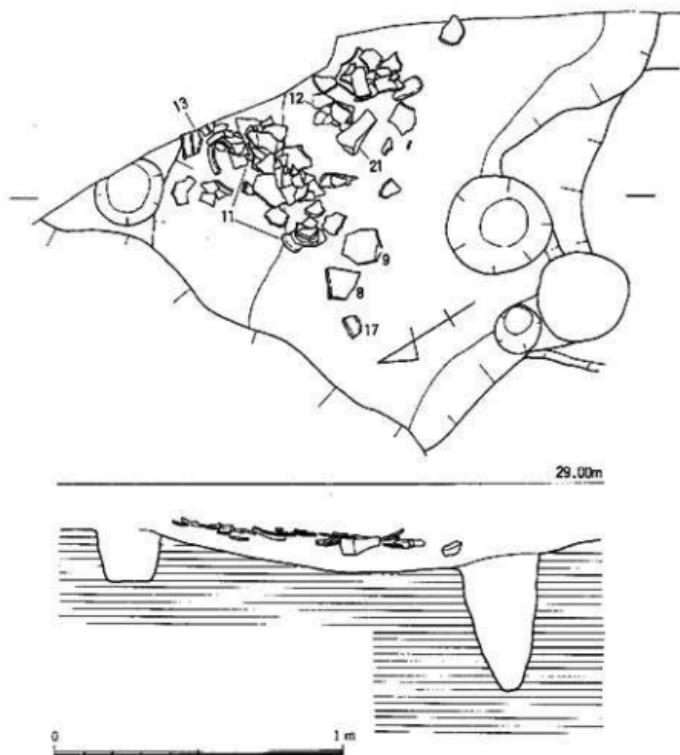


Fig.7 SKO 8 (1/20)

弱を測る。口端部には2段の刻目を加える。全体に磨滅が著しい。色調はオリーブ黒を呈し、胎土は石英粒子が多く含む。8はややゆがむが復元口径19cmを測る。頸部のしまりは弱い。口縁部に刻目を加える。口縁部内面は横刷毛で指おさえ痕が残る。色調は橙色、胎土に石英粒子を多く含む。9は胴部片で、頸部と肩部の境に一条の三角突帯が付き、刻目を加える。内外面調整はナデ。色調は淡黄色。胎土は石英粒子を多く含む。10は底部1/4片。復元底径9cmを測る。底部はわずかに上げ底を呈す。調整は内外面ナデ。胎土は石英粒子を多く含む。

11~16は焼である。11は図上復元したものである。復元口径26cm、器形29cmを測る。口縁部は粘土貼付けし、断面三角形を呈し、口縁部に刻目を加える。胴部上半にかすかに三角突帯が一条巡る。底部は厚い上げ底で、底部の裾部が張り出しふんばった形をとる。器表面は火

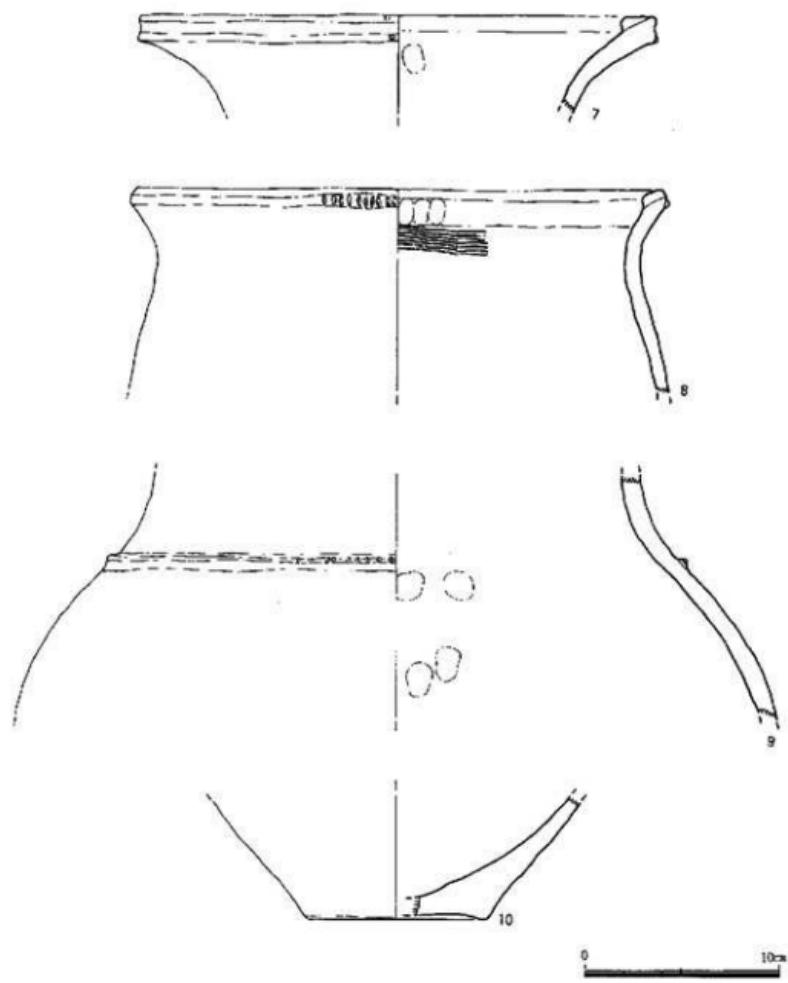


Fig.8 SKO 8出土遺物 1 (1/3)

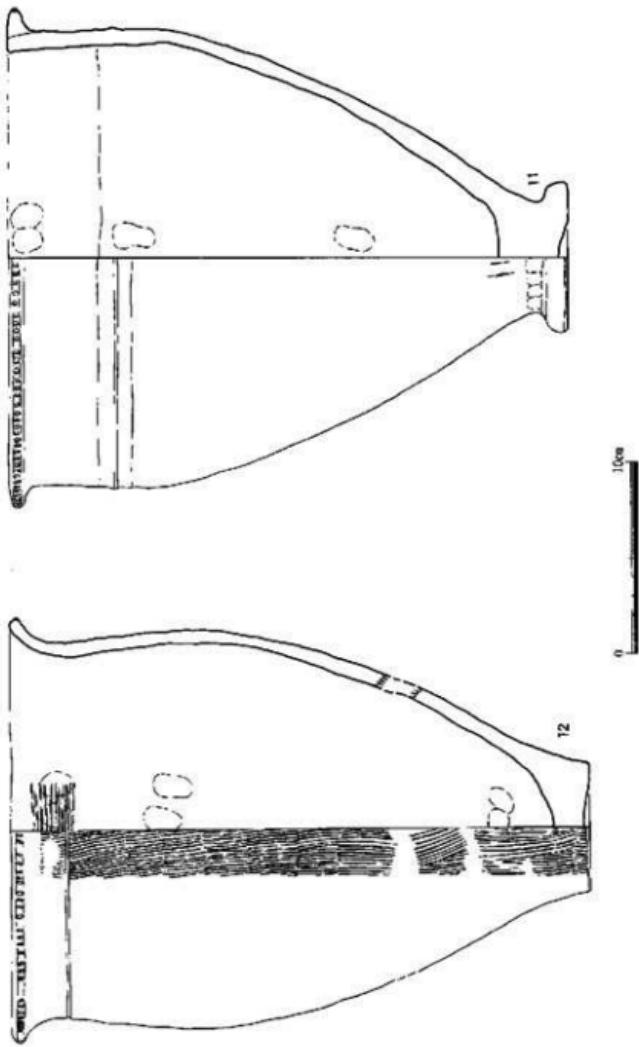


Fig. 9 SKO 8 出土遺物 2 (1/3)

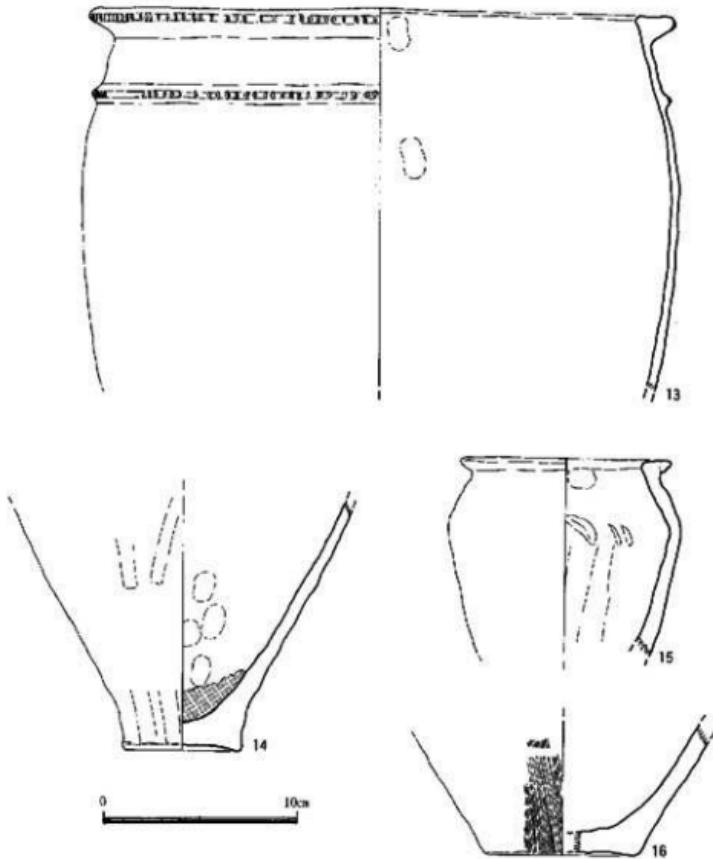


Fig.10 SKO 8出土遺物 3 (1/3)

力によるのか剥落が著しく、内底近くに付着物が付く。色調は暗褐色を呈する。胎土は石英・金雲母を多く含む。12は如意形の口縁部を持つ器形。底部は11に比べて薄く、わずかに上げ底である。復元口径22cm、器高30cmを測る。口縁部は刻目を加える。外面は粗い刷毛、内面は上半に横刷毛を加える。11縁部と胴部の境に浅い沈線が巡る。色調は暗赤橙色を呈し胎土は石英粒子を多く含む。13は口縁部片で、復元口径30cmを測る。口縁部は断面三角形を呈し、や

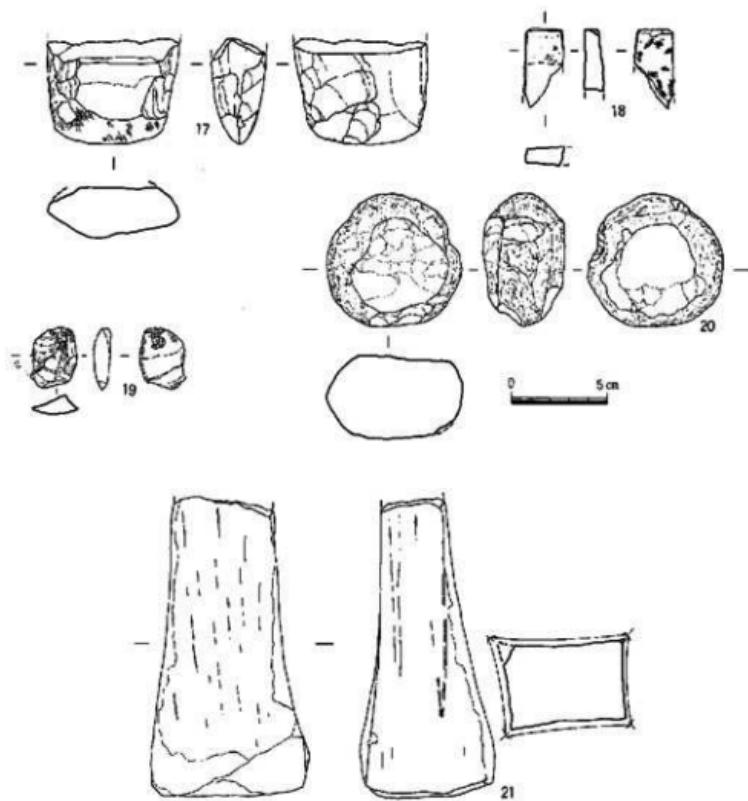


Fig.11 SKO 8 出土遺物 4 (1/3)

やすほまる。口縁直下胴部上半に三角突帯が一条巡り、口端部と突帯にそれぞれ別の工具による刻目が付く。調整は内外面ナデ。色調は淡橙色を呈し、胎土は石英微粒子を多く含む。14は底部片で復元底径約6cmを測る。底部はやや上げ底で、内底部に炭化した付着物が残る。調整は外面は板ナデ、内面はナデで指おさえ痕が残る。色調はぶいい橙色を呈し、胎土は石英微粒子を多く含む。15は小形の壺の1/2片。復元口径約11cmを測る。肩がやや張る器形で、口

縁部の断面は三角形を呈す。調整は内外面ナデ。色調は灰褐色を呈し、胎土は石英微粒子を多く含む。16は底部1/2片で、復元底径8cmを測る。底部は薄く、わずかに上げ底。調整は外斜め刷毛、内面は磨減が著しい。色調は淡黄橙色を呈し、胎土は石英粒子を多く含む。

17~21は石器である。17は今山型の太形蛤刃石斧の刃部片。使用により欠損したのである。残存長5.5cm、刃部幅6.0cmを測る。18は扁平片刃石斧と思われる小片。残存長4.0cm、幅2.0cm、厚さ1.0cmを測る。上下両面擦りを加えるが、風化磨滅が著しい。砥石に転用した可能性がある。頁岩質である。19はスクレーパー。黒曜石の剥片利用のもので、上端に調整を加え刃部を作り出す。長さ3.1cm、幅2.3cm、最大厚0.9cmを測る。20は敲石。直径7cm、最大厚4.2cm、重さ310gを測る。鵝卵状の転石を利用し、上下両面を使用面としている。石質は緑泥変岩か。21は砥石で上端部を欠失する。残存長15.7cmを測る。上下左右4面を砥面として利用。砥面には使用痕跡を残す。石質は細粒の砂岩。鉄分が付着したのか黄褐色を呈す。

壺棺墓

S T09 (Fig.12, P L . 3)

調査区南側で検出した壺棺墓である。S X02に一部切られている。壺棺は長径1.76m、短径1.2mを測る楕円形状の墓壙内に、2個体の複合口縁蓋を口縁部を打ち欠いて合わせ壺のように埋置していた。埋置角度はほぼ水平、主軸方向はN-55°-Eである。出土状態は全体に破損が著しく、特に南側の上壺は底部が欠失していた。北側の上壺は比較的の残存が良好であった。下壺の内底近くには赤色顔料を含んだ土が堆積していた。人骨片は残ってなかった。また南側上壺を挟んで保持しているような形で、長さ45cm前後、幅30~45cm、厚さ12~15cm位の不整円形の扁平な花崗岩転石が底から10cm程浮いた状態で添えられていた。墓壙底の北側と南側にそれぞれ5cm前後の掘り込みがあった。また上下向壺内より大頸窓の胴部片が出土している。壺本体の不足分を補うために使用されたものと考えられる。

出土遺物 (Fig.13~14, P L . 6) 22・23は棺に用いたもの。22は底部を欠失するが、復元口径約40cm、器高80cm以上、胴部最大径66cmを測り、最大径が胴部の上半にある。口縁は複合口縁で、頸部には有輪羽状文が施され、胴外面は横又は斜め刷毛、内面は横ヘラ削りである。胴外面はわずかに叩きの痕跡を残す。外面の色調は淡黄色であるが、本来黒色顔料を塗っていた可能性がある。胎土は石英微粒子を若干含む。

23は下壺で、口径38.3cm、器高84.5cm、胴部最大径65.0cmを測る。頸部に1条の突帯が付き、その上面は斜め又は横方向の刷毛、内面は横方向のヘラ削り、外面は叩きの痕跡が残る。胴部上半には焼成後に穿孔がある。外面の色調は淡黄橙色を呈すが、丹塗りの可能性がある。また黒斑が見られる。胎土は石英・褐色粒子をわずかに含む。

24は上壺内出土の棺の補光用として使用された壺胴部片。口縁部は丁寧に打ち欠く。最大胴径51.0cm、器高44cmを測る。内外面横・斜めの粗い刷毛で外底はヘラナデ、内底はヘラ削り

である。内外面粘土帶の痕跡が認められる。胴外面上半に赤色顔料を部分的に塗布した痕跡が認められた。外面の色調は桃色、胎土は石英粒子を若干含む。

25は下壺内出上の壺胴部片。胴部最大径約63cm、残存高47cmを測る。外面はかなり磨滅するが、縦の刷毛目が残る。内面は横又は斜め刷毛、内底部はヘラ削り。外面の色調は浅黄橙色を呈し、胎土は石英粒子を多く含む。

溝

S D 01

S X 02の上面で検出した東西方向の小溝。幅25~30cm、深さ10cmを測る。埋土は黒灰褐色土である。

出土遺物 弥生土器片と剝片が各2点ずつ出土した。

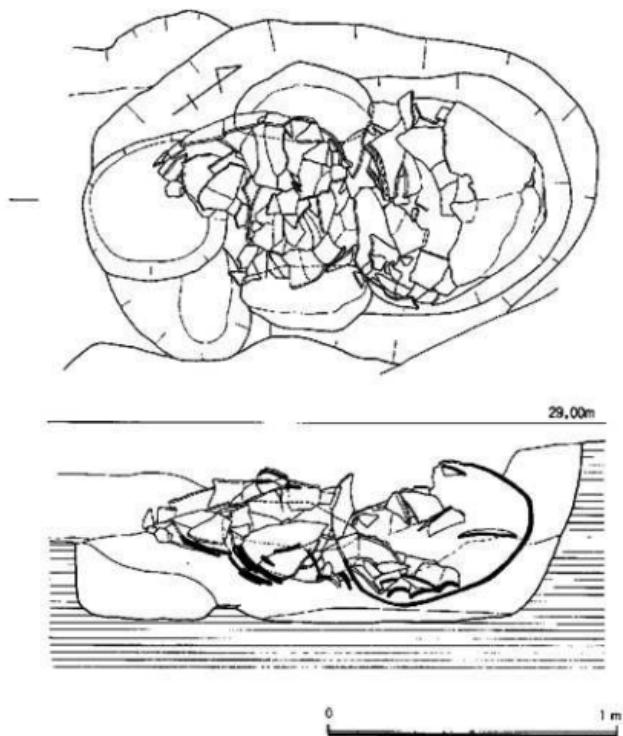


Fig.12 S T O 9 (1/20)

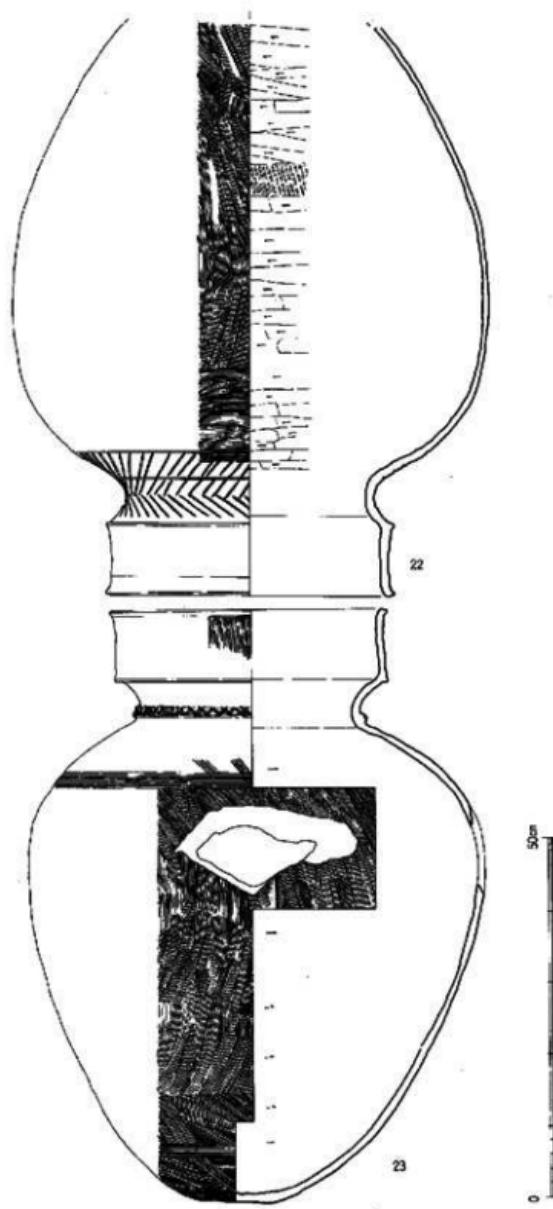
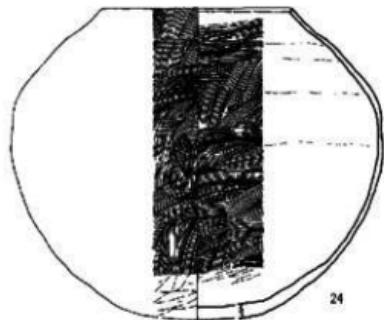
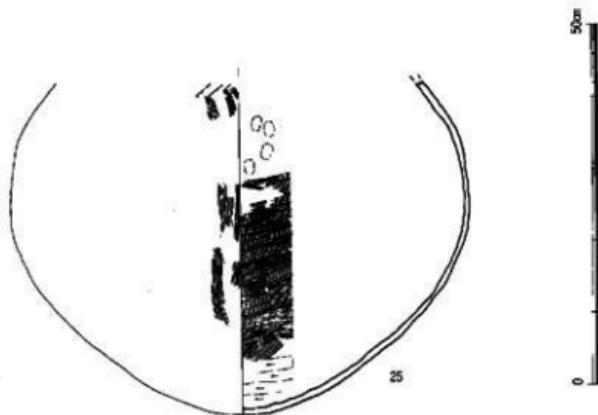


Fig.13 STO 9 出土遺物 1 (1/8)



24



25

Fig.14 S T 09出土遺物 2 (1/8)

その他の遺構と包含層出土遺物

S X02

調査区南側で検出した浅い落ち込みで、S K08やS T09を切っている。底面は平坦でなく凹凸がある。埋土は黒褐色粘質砂や黄褐色粗砂混り粘土を主体とする。

出土遺物 (Fig.15) 弥生土器から土師器・須恵器・磁器・剝片などを含むが、量が一番多いのは土師器である。

26は白磁碗の底部 1 / 3 片。復元底径5.6cmを測る。高台は削りを加え、高台内面は露胎である。27は弥生土器の壺と思われる口縁部小片。口縁部はやや外反し、端部が平坦を呈す器形。

小片からの復元で若干器形は正確さにかける。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に金雲母・石英を多く含む。

包含層出土遺物 (Fig. 15, P L. 4)

弥生土器から近世の染付迄の遺物を含む。

28~30は上層出土。28は土師器の壺口縁部小片。復元口径19cmを測る。外面は斜め刷毛、内面はヘラ削りを加える。色調は外面が灰白色を呈し、胎土は石英・雲母を若干含む。29は瓦質か土師質の椀底部1/3片。底部に低い断面三角形の高台が付く。調整は内外面ナデ。色調は外面淡黄色、内面灰白色を呈す。胎土に石英微粒子を含む。30は土師器皿の底部1/3片。復元底径9cmを測る。底部は糸切り。

31は下層出土。弥生土器の壺頭部1/4片。頭部と胴部の境に一条の三角突帯を貼り付ける。外面調整はヘラ研磨、内面はナデ。肩部内面に指おさえ痕が残る。色調はにぶい橙色、胎土に石英粒子を多く含む。

32は瓦質土器の鍋小片。復元口径27cmを測る。外面は指ナデ調整、内面は上部が斜め刷毛を加える。色調は暗青灰色を呈し、胎土は石英微粒子を多く含む。

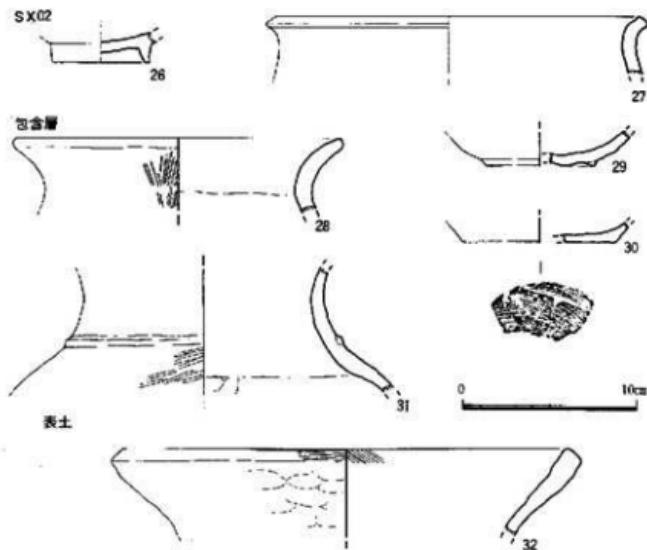


Fig.15 S X O 2 包含層・表土出土遺物 (1/3)

3. まとめ

狭い面積ではあったが、古墳時代前期の壺棺墓が発見されるなど多大な成果があった。遺構の時代は大きく3時代に分かれる。Ⅰ期は弥生時代中期初め頃、Ⅱ期は古墳時代前期前半、Ⅲ期は中世である。

Ⅰ期のものはS K 08がある。この上坑は形態、遺物の出方から土器溜め的な廐棄土坑であろう。土器はいわゆる亀の甲式といわれるものである。圃場整備による重留遺跡群の調査でも弥生時代前期の集落が検出されているので、それに関連するものか。

Ⅱ期のものはS T 09である。これは2個の大型壺を合わせ口にしたものであったが、それぞれに別の固体の壺の破片が腹い用に使われていた。腹いに使われていた破片は大型壺であるので、周辺にも同様の壺棺があったのかもしれない。この種の墳墓は、市内では藤崎遺跡、県内では筑紫野市の岬山遺跡や久留米市の祇園山遺跡、太宰府市の宮の本遺跡、那珂川町の井河古墳群などでも検出されている。いずれも墳墓群を形成していることから、本地点でも単独ではなく、周辺に同時期の墳墓群が存在する可能性がある。今後の調査に期待したい。

Ⅲ期のものはS K 06であるが、糸切りの手法や個体の法量などから13世紀前半のものか。熊本遺跡群の調査は今回が初めてであるが、今回の調査が今後の周辺の調査の一助になれば幸いである。

なお、福岡市埋蔵文化財センターの本田光子氏には、S T 09内出土の赤色顔料の分析を突然に依頼して、大変ご迷惑をおかけした。文末ではあるが、記して感謝の意を表す次第である。

4. 壺棺内の赤色顔料について

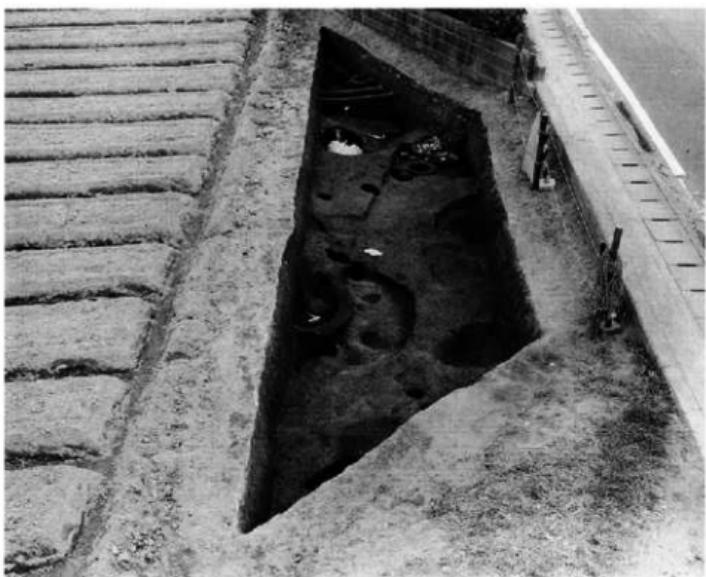
壺棺内の土がやや赤く染まった状態である。比較的赤色の濃い部分を観察した所、非常にわずかであるが、赤色顔料の凝集した小塊を認めた。この小塊について、顕微鏡観察、蛍光X線分析、X線回折の測定を行い、赤色顔料の種類を調べた。顕微鏡観察では、ベンガラ粒子を認め、その他の赤色顔料粒子は認められなかった。なお、ベンガラにはいわゆる顕著なパイプ状粒子は含まれていなかった。蛍光X線分析では、赤色の由来となる主成分元素としては鉄を検出し、水銀、鉛は検出されなかった。X線回折では赤色の由来となる主成分鉱物として赤鉄鉱を同定した。以上の結果から、壺棺内の赤色顔料はベンガラである。

出土状態から見て、ベンガラは壺棺内面に塗布されていたのではなく、遺骸に施されていたものと考えられるが、ベンガラのみが凝集した小塊が少ないとから、使用量はあまり多くはなかったと思われる。弥生時代の壺棺墓では遺骸に施される赤色顔料としては朱が使われる。壺棺墓の衰退と共に主に埋葬施設内面にベンガラが多用されるようになるが、遺骸に朱だけ、遺骸には朱および埋葬施設にはベンガラ、埋葬施設にベンガラだけの場合がある。この傾向は古墳時代も同じである。遺骸に直接使われる赤色顔料は朱が多いことから考えると、本例についてはベンガラだけが遺骸に施されていたという点が墳墓の特徴の一つとなるのではないだろうか。

(本田 光子)



(1) 調査区遠景（北東から）



(2) 調査区近景（北東から）



(1) 調査区南側（北西から）



(2) SK08（北東から）



(1) ST09 (北西から)



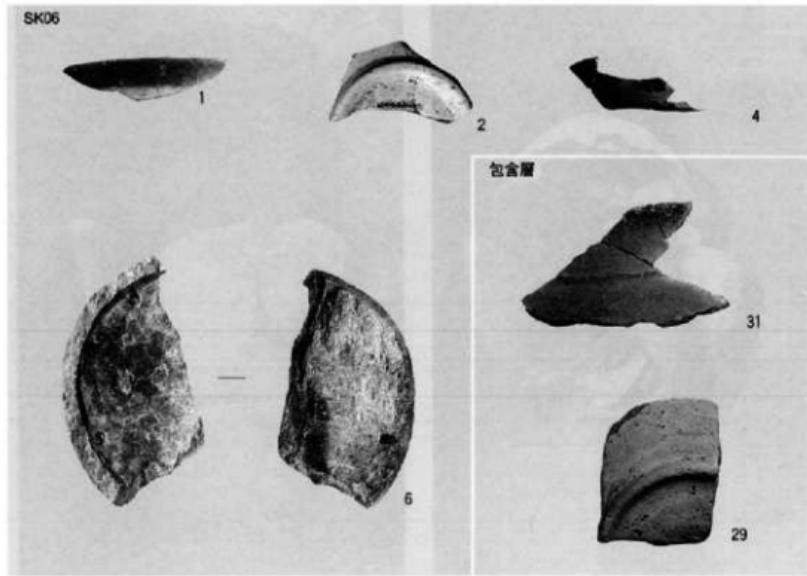
(2) ST09 (南西から)



(3) ST09墓壙 (南西から)



(1) SK06 (西から)



(2) SK06・包含層出土遺物



12



11



13



8



15



9



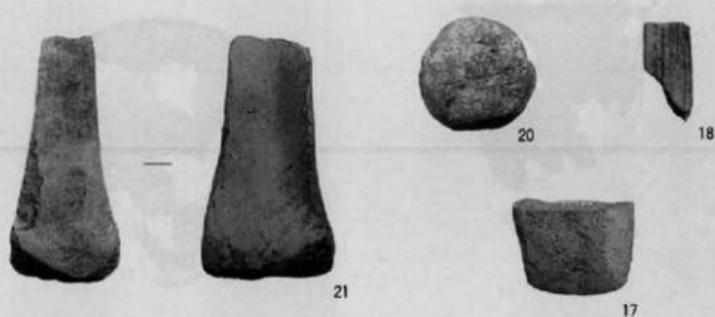
16



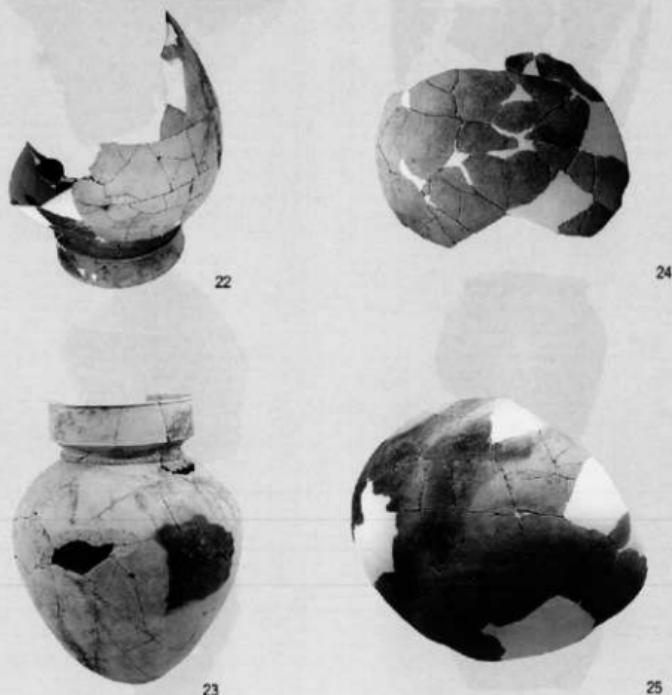
14

PL. 6

SK08



ST09



SK08·ST09 出土遺物

熊本遺跡群 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第341集

1993年（平成5年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神丁目8-1

印刷 久野印刷株式会社

福岡市中央区天神5丁目5-8
